

長崎大学は初めて 爆心地と 地続きになった

長崎原爆資料館館長 芥川賞作家

青来有一

せいらいゆういち
1958年長崎生まれ。市立城山小学校、淵中、県立西高、長崎大学と、すべて爆心地から3km以内。今も長崎原爆資料館館長として活躍中。作家としては「聖水」で第124回芥川賞を受賞。ペンネームの由来はアニメ「セーラムーン」からと言われるが「誤解です。本当は違います。似たことない。でももう面倒なので放置しています(笑)」。本名は中村明俊さん。



作家と市役所の仕事は
つながっている

社会で活躍している長崎大学の卒業生にインタビューする新企画がスタート。

一人目は、作家で、長崎市の施設、長崎原爆資料館の館長でもある青来有一さんにご登場いただきました。一九八一年教育学部の卒業生です。写真撮影のため、資料館のお隣にある国立追悼祈念館へ。

な資料を見ただけで帰られるのも、少し辛い。その後に追悼の時間を持ってもらえるといいな、と思います。

作家として、二〇〇一年、『聖水』で第一二四回芥川賞を受賞。当時から長崎市役所職員だったことが話題になりました。

「四十代初めの受賞で、ある程度の年齢でしたから、まわりの状況もわかりましてね。こうした小説では食ってはいけないだろう。間違っても役所をやめてはいけないと(笑)」。

「はい。主演の北乃きいさんが長大のグラウンドで撮影するというので、文教だとばかり思って駆けつけたら坂本キャンパスだった(笑)。寒い日に夏のシーンの撮影だということで、肉まんをたくさん差し入れましたよ。皆さん喜んでくれました。映画は楽しみですな」。それにしても役所の仕事と作家活動の両立が大変でしょう。執筆はいつするんですか？

「夜型で、人が寝静まってから書きます。日々の生活が自然に反映してきますね。市役所の仕事って人と出会うのが仕事で、そうした出会いや職場での経験が小説のヒントになるとあります。例えば文化財担当のとき、市の中心部の工事現場から、花十字の紋章が

いた瓦の破片がざくざく出てくるのに立ち会ったことがありました。そういう経験からイマジネーションをふくらませることもあります」。小説は学生のころから？

爆心地3km以内に 生きるということ

青来さんは、昨年長大にできたRECN A(核兵器廃絶研究センター)にも協議会副会長として参画されています。文教キャンパスにもときどき足を運ぶんですね。

「はい、帰ってきたな、という気分です。大学で新しく作り上げていくもののお手伝いができるのは嬉しいことです。私は小中高校とずっと爆心地から3km以内で育ってきて、被爆の歴史を意識してきました。ところが大学に入ると、きれいなキャンパスで別空間。でもこの場所には兵器工場があって、多くの方が亡くなったのも事実です。RECN Aができたことで、長崎大学は長崎の大学としてやっ

と爆心地と地続きになりました」。作家としてのテーマを「人間と神と信仰の関わり——人間は神様を棄ててきたのではないか」とし、長崎の歴史を題材にしながら心のなかを掘り下げていきたい、という青来さん。長崎で生きていく意味を見つめながら幅広く活動していく、こんな先輩がすぐ近くにいて大学に関わってくれる、なんとも頼もしい存在です。

